

英文訓読が拓いたもの

藤 本 幸 伸

The (In-)Tractability of Translating English Texts in the KANBUN Style

FUJIMOTO Yukinobu

(Received September 28, 2012)

漢文訓読の方法が、幕末および明治初期の英学に大きな影響を与えたことは周知の事実であろうし、柳父章の一連の翻訳文化研究や森岡健二による欧文訓読研究など優れた成果も積み重ねられている。今さら漢文訓読と英学について、新しい発見などあろうはずもないと考えるのが、至極常識的かもしれない。しかし、改めて、英学が模範にした漢文訓読とは、実際どのような訓読だったのか。欧文訓読や欧文直訳などの翻訳スタイルは、いつまで続いていたのか。また、英語学習の中で、このような漢文訓読はどのような影響を現在まで及ぼしているのだろうか。このような問題群について、既に柳父章や森岡健二に加え『漢文脈の近代』『訓読論（正・続）』『漢文訓読と近代日本語の形成』などである見通しが立てられている。だが、いずれの研究も漢文訓読と近代日本語との関わりに焦点を当てた研究で、漢文訓読が英学へ与えた影響の考察を含むとは言え、（当然と言えば当然だが）その影響（功罪）の検討は希薄と言わざるを得ない。

本論は、漢文訓読を模した英語の読み方（ここでは英文訓読としておく）の功罪を英語教育の観点から再検討する試みであるが、紙数の都合上、数編に分けて論じることになる。今回は、漢文以外の外国語学習で、英語教育に多大な影響を与えた蘭学と、その蘭学が外国語学習の雛形とした漢文訓読法について振り返っておきたい。私のごとき英語学徒は漢文訓読と一括りにして分かったつもりになっているのだが、どうやら時代によってこの漢文訓読の有りようは様々であったようである。とすれば、従来漢文訓読の方法を手本としてオランダ語を学習していったとされる蘭学もまた、その時代の漢文訓読の有りように多大な影響を受けていると推測できる。このように英学が模した蘭学がその時代の漢文訓読の有りように影響を受けていたとなれば、英語学習法と英語文化受容の型は二重の意味で漢文訓読の有りようの影響下にあったと言って大過ないであろう。

蘭学と英学に多大な影響を与えた漢文訓読は、時代を通して固定した訓読の仕方があったわけではないらしい。中国文語文の日本語への翻訳である漢文訓読は¹⁾、流動的で自由な訓読であった初期から平安時代中期にはいるあたりから訓読の仕方が固定化し始め、と同時に流派によって訓読法に差が生まれた。この流派ごとの訓読法が、師から弟子へと伝えられるようになって藤原家・大江家・菅原家といった博士家が登場する。そして漢文訓読語という日本語表現の一つの型が成立し、訓読する際の用語や文法が一定の形式に固定化すると、歴史的な変化を被ることが少なかった。しかし、時代に応じて変化していく口語表現とこの漢文訓読語との隔たりがますます大きくなり、漢学が盛んになった江戸時代には、新しい漢文訓読を試みる学説が登場し始める。

齋藤文俊は、従来の訓読と比べた新しい訓読の特徴は、訓読の簡略化にあると指摘している(31-68)。簡略化とは、漢文に読みそえる補読語が減少し、音読が増加するという現象を指す。このように漢文訓読が簡略化していく時期に、蘭学が始まる。詳しくは後で検討することにするが、この漢文訓読の簡略化が始まるのが、江戸時代後期の18世紀後半から19世紀前半にあたる。この18世紀後半はまさに蘭学の草創期にあたるのである。『解体新書』の完成が1774年、前野良沢の『和蘭訳筈』と大槻玄沢の『蘭学階梯』が世に出るのがそれぞれ1785年と1788年、初めての蘭和辞典『波留麻和解』は1796年に完成し、刊行される。このような時代状況を勘案すると、簡略化された漢文訓読法が蘭学の語学学習法に大きな影響を与えたと見てよいだろう。

では、なぜこの江戸時代後期に漢文訓読の簡略化が生じたのだろうか。これは一つの憶測に過ぎないが、ちょうどこの時期が寺子屋の激増期に当たることと無関係ではないだろう。寺子屋の多くは、読書・習字と計算(算盤)を教えていたが、1830年頃(天保)から学習内容が読書から漢学に替える寺子屋が急増した²⁾。全国の寺子屋で漢学を教えるためには、ある程度の質を確保した訓読法が必要であったはずである。教育の民衆化には、誰が教えてもある程度の教育の質保証が可能となるマニュアル化が必要となる。そのマニュアル化に対応したのが、漢文訓読の簡略化と言えるのではないのだろうか。

このような時代の要請により簡略化した漢文訓読を基にして、蘭学は開始された。簡略化した漢文訓読の特徴は、先にも触れたように、補読語の減少と漢語の音読の増加であった。それまで訓読していた漢語を字音化する例を挙げれば、「やどる」と読んでいた「宿」という語を「シュクス」と音読する場合である。このような字音化の増加に伴って、補読語も減少し、更に自立語の読み方も形式化してくる。「レバ則」と呼ばれている「則」という語が、江戸時代前期では「トキハ」もしくは「レバ」と読まれていたのが、江戸時代後期には「レバ」に統一される。また、「則」の語が文中にない場合でも、江戸時代前期は「トキハ」あるいは「レバ」と読んでいたのが、江戸時代後期になると直前の語の連体形に対応し、意味に応じた訓読を施さなくなっていく。つまり、補読語の減少と漢語の字音化の増加は、漢文の読解とは切り離れた、機械的形式的な漢文訓読へのシフトを意味していたと言えるだろう。

しかしこのような簡略化した漢文訓読には、学習者に困難を強いる側面があったことも見逃してはならない。漢語は音読しただけでは、その意味を理解することは難しい。音だけでなく、同時にその文字を思い浮かべながらでなければ、その後の意味は解しがたくなる。また、補読語が少なくなるということは、先の「レバ則」にもあったように、句と句の関係、文と文の関係が訓読には反映されないということを意味する。訓読の段階では、句と句が、文と文が、論理的にどのように接続しているのかの読解の結果を明示することなく、形式的に「レバ」と読んで済ませることができることになる。これはある意味で、学習者の読解のレベルはさておいても、一応の漢文訓読を可能にする。一応の漢文訓読が可能となれば、読誦を繰り返せば、漢文を暗記できると言うことでもある。

訓読の形式化簡略化と引き替えに、意味の分かりやすさを犠牲にしたが、この意味の分かりにくさという負の側面は、必ずしも重大な要素ではなかったとも言える。補読語の少なさは記憶を容易にし、漢語の字音は元の漢語を想起しやすくさせるという利点の方が大きかったのだ。同じ漢文を暗唱できるということは、暗唱した者同士の間にある種の同胞意識を芽生えさせ、暗唱できない者に対してある種の特権意識を醸成することになる。³⁾しかしこのような漢文訓読の簡略化は、蘭学や英学にとっては大きな負の遺産として残ることになる。

漢文訓読を模した蘭学は、18世紀末から19世紀初めにかけて活躍した中野柳圃、馬場佐十郎、藤林晋山らの文法研究を受け、19世紀半ば（具体的には1830から59年）には辞書や翻訳法および教育法が整備され充実期に入る。ところが大庭雪斎の『訳和蘭文語』が世にでた1855年は、蘭学の最盛期を記念すると同時に蘭学の終焉でもあった。折しもその前年にペリーが浦賀に襲来し、この黒船来襲を境に学習すべきヨーロッパ語はオランダ語から英語に移行することになる。これは、蘭学には不幸であったが、英学の出立には幸運な面もあった。英語もオランダ語も同じ系統に属し、蘭学者が苦勞して整えた文法の扱いや辞書編纂の手際をそのまま応用できたはずだからだ。

ここで簡略化した漢文訓読と蘭学の翻訳を簡単に確認しておきたい。この比較によって蘭学の語学学習法がどの程度まで範を漢文訓読に負っていたのかがはっきりするはずである。まず『漢文訓読と近代日本語の形成』から、簡略化した漢文訓読の例を見ておきたい(35-6)。『論語』の中の「欲レ速則不レ達」を、博士家では「速（カニセ）むと欲すると（キ）は達（セ）不」と訓読するところを、18世紀後半の代表的な訓読では次のように読んでいたらしい。以下の例では、返り点を略して補読語を残してある。

欲スレハ速ナランコトヲ達不	春台点 (1754年)
欲スレハ速ナラント達不	後藤点 (1794年)
欲レハ速ナルヲ達不	一斎点 (1825年)

時代が下るにつれ明らかに補読語が減少していくのが分かる。漢語の字音化は「宿」の語で見たとおりである。補読語が少なくなると、それに比例して漢文の音読は簡潔になり、暗唱も容易になる。次に蘭学者の前野良沢が「蘭化亭訳文式」という「翻訳の業」を『和蘭訳筈』(1785)から引いておこう(『洋学 下』122)。

右の図にあるようにオランダ語の下に漢語とともに訳順を示した記号を記している。そして「読法」の欄でカタカナで発音を示した後、語句注となる「訳言」が続く。⁴⁾最後に「切意」という項目で翻訳が登場する。その「切意」は「諸子ヲシテ、簡易ナル法ニ就テ、用字・読書及画字ヲ学習セシム。応ニ久シカラズシテ、大ニ益ヲ得ベシ。」と漢語が多い漢文訓読となっている。この図を見ると前野の『和蘭訳筈』で蘭学を学ぶものは、オランダ語の意味を漢語で理解し、その後漢文訓読していたことが分かるだろう。

次に、門人の質問に答えるという問答スタイルで語学学習の心得を説いた大槻玄沢『蘭訳梯航』(1816)の文章で、蘭学が漢文訓読を模していたことを確認しておきたい。「西文」を理解するための範として「漢文ヲ解スルノ大法ヲ示セル」「春台ノ和読要例」を手本としたことを明言した後(春台とは、上でも挙げた太宰春台のことである)、次のように諭す。

<p><i>Zeer bekwaam om alle</i> 大(宜)適(子)応(令)諸 賈 得 癸 甲 △ 益 卯</p> <p><i>Persoonen in korten tyd op</i> 子。△ ○(短)不。(時)(在 乙 及。 丑 就 戊</p> <p><i>de gemakkelykste wyze te</i> ○ 易 簡 法 ○ 丙 丁</p> <p><i>leeren Spellen Lezen en Schryven.</i> 学 用 読 及 画 習 字 書 字 壬 己 庚 辛</p>	「レ ッ テ ル コ ン ス ト ノ 題 言 中」
---	--

口ニテ読ムバカリニテハ、西文ノ義理見エガタシ。只口ニハ倭語ノ読ヲナストモ、目ニテ其毎語ヲ看テ、其上下ノ位ヲ分別シ、助語辞マデニ一々ニ目ヲ属ケテ、仔細ニ看テ、心ニハ其句法ト諸言ノ置キカタノ種々変化・異同アルコト思量シテ、彼人ノ音ニテ順ニ読ミクダス

心ニナリテ、西文ノ条理・血脈ヲ識得センコトヲ要スベシ。只読テ解ストイウバカリニテハ、カクノ如クノコトナリ。故ニ其功少シ。(『洋学 下』396)

簡略化した漢文訓読が暗唱を容易にし、日本語への翻訳である漢文訓読をもとにして、原文である漢文を想起する。漢文訓読はそれ自体で意味理解が可能な独立した表現であったのではなく、あくまでも元の漢文を想起し、想起した漢文を理解するための便法に過ぎなかった。大槻玄沢の言う「目ニテ其毎語ヲ看テ、其上下ノ位ヲ分別シ、助語辞マデニー々ニ目ヲ属ケテ、仔細ニ看テ」という学習方法は、まさにこの漢文理解の便法と同じであり、**切意**だけで意味が分かるとは想定していなかった。だからわざわざ「只読テ解ストイウバカリニテハ、カクノ如クノコトナリ。故ニ其功少シ。」と忠告し、オランダ文の理解は後から帰って読むことなく「彼人ノ音ニテ順ニ読ミクダス心ニナリテ」、オランダ人が読むのと同じように「西文ノ条理・血脈ヲ識得」するのが本道と説いているのである。

幕末に蘭学という外国語学習のエッセンスを利用して開始された英学は、明治時代に入り、空前の英語ブームを迎えることになる。雑駁に明治時代初期の英学を巡る動きをまとめると、1856年に設置された幕府の洋書研究機関である蕃書調所で、1858頃から英語の研究が始まり、早くも1860年には英学科が開設される（因みに、この蕃書調所の首席教授であった箕作阮甫は蘭学者であった）。明治時代に入って早々の1873年、開成学校では教授言語が英語に統一され、また同時期に東京外国語学校が開設されると、大阪、長崎、愛知、広島、新潟、宮城にも官立の外国語学校が開設された。翌年、東京外国語学校の英語科が独立し、東京英語学校と称するようになると、他の官立外国語学校も英語学校と称するようになる。ペリー襲来からわずか20年の内に英学は官立学校の中心科目にまで上り詰めることになった。英学がこのように優遇されることになったのは、やはり蘭学が研鑽してきた外国語学習の成果によるところが大であろう。

ところで、このような英語ブームを冷静に見つめると、必ずしも喜ばしいことばかりではなかったと言える。明治時代初期の官立学校での英語学習は、いわゆるお雇い外国人が英語で、英語のテキストを使って授業をし、答案も英語で書くという英語漬けの教育であった。しかしこのような実用的な英語教育を受けることができたのはごく一部であり、後は私塾などで日本人から英語の手ほどきを受けざるをえなかった。英語の教科書が少なかった明治時代初期は、それでも英文法書を使って文法習得と読解訓練を兼ねる英語学習を行っていた。そんな中、福澤諭吉が数十冊単位で教科書や辞書を購入していた慶應義塾は英学の中心的存在であり、後に慶應義塾の卒業生が全国の英語教員となっていく。

ここで英語教科書と漢文訓読との関係を見ておこう。英語教科書が希少であった明治時代初期は、その希少な教科書の直訳本が刊行され、これで英語に限らず歴史や経済、物理学や工学などの学科を学習していた。有名な例がパーレーの『萬國史』であろう。以下に引用するのは、明治9年文部省から発行された翻訳である。

第一章 諸言

風船ニ駕シテ游行スル事並ニ目撃スル所ノ奇事ノ説話

○汝若シ風船に駕シテ飄揚シ空中ヲ游行セバ汝見テ以テ愉快トセン事ソレ幾多ソヤ」一時ハ都府ヲ經過シ又一時ハ溪谷江河或ハ丘阜山岳ヲ俯視スルナラン (1)

一読して明らかなように、「駕シテ」「游行セバ」「見テ以テ」「愉快トセン事」など漢文訓読の送り仮名そのままであり、翻訳に使われている漢語はほぼ音読することが前提となっている。まさか「駕シテ」の「駕」は「の」とは読まず、「ガ(シテ)」と読むはずであり、「飄揚」は「ヒョウヨウ」以外に読みようがないだろう。まだ辞書も整わない時代でもありこのような漢文訓読といってよい直訳は、これを読んでおおよその意味を理解した上で、英語原文を読み進めるために使われていたのだ。

このように教科書が少なかった時期が明治18年頃まで続き、明治18年頃から30年頃にかけて英語教科書の翻刻本が出版されるようになる。この翻刻本時期になると、英語の読解は文法とは切り離され、英米で発行されているリーダーと言われるアンソロジーの翻刻本で学習しはじめる。この翻刻本期は文部大臣の森有礼による英語重視期と重なり、全国各地に公立中学校が創設され、英語教科書の需要が一気に拡大する時期でもあった。そして明治30年以降は、日本人英語教員も輩出するようになり、日本人の手になる英語教科書および受験参考書が作成されるようになる。

先に蘭学が開始された時期の漢文訓読は、補読語の減少と漢語の字音化を特徴としていた。この簡略化された漢文訓読を模して蘭学者たちは、オランダ語を理解しようとした。そして英学は、その蘭学のエッセンスを利用して英語学習の型を作り上げ、急速に広まっていく。蘭学が当時の漢文訓読の影響下にあったのと同じように、英学は蘭学を介して漢文訓読の影響を受けていただけでなく、幕末から明治期の漢文訓読の有りようにも大きな影響を受けることになる。それは、齋藤稀史(2007)が言う「漢文から訓読文が独立」(78)する現象である。簡略化した漢文訓読は素読に適合したのだろう、寺子屋の教育を通じて民衆に広まっていく。簡略化した漢文訓読は、本来もとの漢文を復元するのに叶っていたのだが、素読によってこの簡略化した漢文訓読の独特のリズムが生まれ、そのリズムが人々(といっても明治に知識人のことだが)の中に新たな日本語を作り出していくことになる。明治時代「普通文」と言われた、公式の文章や新聞の社説などに使われた文体である。

補読語が減ると読む語数が減る、漢語を音読すると調子が整う、といったまさに素読にうつつけの漢文訓読が生まれていったことになる。そして素読を介して、この簡略化した漢文訓読は新たな公式の文体として採用され、知識人たちが知識人たることを示す文体ともなっていく。では、このような漢文訓読の有りようが、英語学習のどのような影響を及ぼすことになるのであろうか。そのヒントを福澤諭吉が漢学の塾に通っていた頃の回想の中にある。

福澤諭吉は、当時としては遅く14, 15歳になって漢籍を学び始める。朝、漢籍の素読をし、午後になると朝素読を教えた人が先生となって、漢籍の解釈を教えるというのが、当時一般的な漢文の学習であった。

外の者は詩経を読むの書経を読むのというのに、私は孟子の素読をするという次第である。ところがここに奇なことは、その塾で蒙求とか孟子とか論語とかの会読講義をするということになると、私は天稟、少し文才があったのか知らん、よくその意味を解して、朝の素読に教えてくれた人と、昼からになって蒙求などの会読をすれば、必ず私とその先生に勝つ。先生は文字を読むばかりでその意味は受け取りの悪い書生だから、これを相手に会読の勝敗なら訳けはない。その中、塾も二度か三度か更へたことがあるが、最も多く漢書を習ったのは、白石という先生である。そこに四、五年ばかり通学して漢書を学び、その意味を解すことは何の苦勞もなく存外早く上達しました。(15)

ここに幕末の典型的な漢文学習の姿が語られている。朝は素読をして、午後になると上級者と漢籍の解釈を議論するというスタイルである。江戸時代後期に漢文訓読は、補読語を少なくし漢語を音読することが多くなった。このように訓読、つまり日本語への翻訳が簡略されると、その分素読しただけでは意味は解せない部分が残ってしまう。ここで、福澤諭吉の回想にある「会読」という解釈の過程が重要な意味を持つ。この「会読」の段階で、素読だけでは理解が行き届かない箇所をお互いに問いただし相互に納得をしていくのである。おそらく、この「会読」の過程で得られた解釈が逆に素読の中に組み込まれることによって、簡略化した漢文素読でも充分意味を理解することができたのだろう。漢文訓読の表現でわざわざ解釈を明示しなくても、意味理解に大きな支障はなかったと言えるだろう。

このような意味解釈を組み込んだ簡略化した漢文訓読が英学に大きな影響を与えることになる。漢文訓読の簡略化によって漢語を字音化する頻度が多くなると、従来訓読していた漢語までも字音化するようになり、ますます漢語の字音率が増えていくことになる。一例を挙げると、「直行」や「断行」は「じきに行く」や「だんじておこなう」と文として読まれていたのが、江戸時代後期になると「チョッコウ」や「ダンコウ」と音読されるようになっていく（齋藤、62-65）。このような漢語の音読化が常態としてあった状況で、漢文訓読を模した英語から日本語への翻訳にも、字音化した漢語が多用されるのは当然と言えるだろう。

この漢語の多用が英語学習にとっては大きな躓きとなっていく。漢文訓読はたとえ簡略化されたとしても、「素読→会読」という解釈過程を組み込んだ外国語学習法であった。たとえ漢文は外国語であると言っても、大部分の漢字は共通であり、漢字を見ればその意味は推測可能である。ところが、言語系統も概念も異なるヨーロッパ語である英語の場合、いかに漢語を駆使してもその概念は了解しにくい。福澤諭吉もrightという語の訳語を「通義」をはじめとして様々工夫したが、結局その概念を伝える訳語を作り出すことができなかつたことから分かるように、英学にとって簡略化した漢文訓読の影響はマイナスに作用することが多かったと言えるだろう。更に今日では、この漢語に加えカタカナ語の多用も加わって、英語文の日本語訳はすさまじく分かり難さを増していると言えるだろう。

江戸時代後期の漢文訓読が、寺子屋などの教育の民衆化を機縁として、その簡略化を進めたとと言えるならば、明治時代の英学は、公立学校や私立英学塾での学習、更には入試対策の受験参考書の普及などと相まって、一層大衆化画一化していった。福澤諭吉が受けたような漢文学習では会読という解釈の共有制度が存在したが、英学ではその普及の範囲の広がりとスピードの早さの故に、解釈の共有という制度が成立しにくい状況が生まれていたと言えるだろう。

先に触れたように、明治時代に入り漢文から漢文訓読が独立し始める。これは明治時代の知識人が漢文訓読の文体で文章を書いていったので、元々復元すべき漢文を持たない。しかしこの知識人の新しい文体のリズムは漢文訓読のリズムそのものであることから、復元すべき漢文を持たない漢文訓読が独立した存在として認定されていくことになる。そして漢文訓読の漢文からの独立という事態が、英学には大きな負担となる。

漢文訓読は漢文から独立しても、元々が日本人が漢文を模して作った文体であるので、その意味解釈に困難はない。だが英語の場合、英文訓読という直訳が英文から独立してしまうと、その意味解釈は困難を極めることになる。統語構造をはじめ、元々<民主主義>といった概念がない日本語に「民主主義」と漢語の訳語を当てはめても、その意味理解は難しいであろう。さらにそこに、補読語を少なくして抽象的な漢語で構成された英文直訳は、それを理解するの

に特別な訓練を要することになる。ここに英文直訳を解する者たちのエリート意識が凝縮されることになる。⁵⁾

このようなエリート意識の表れとしての英文直訳と教育の民主化（大衆化）との間隙を埋めるべく、学習塾に通うことの適わない者たちにも利用できるように英語の参考書が大量に生産されるようになるのが、明治20年前後である。その典型的な参考書が、〈英文一訳一意訳一語句注〉というパターンを生んだ元木貞雄の『意解挿入ニューナショナル読本直訳』であろう。⁶⁾

漢文訓読を模した英文訓読の功罪を英語教育の観点から再検討する試みは、まだまだ触れなければならない点が多い。今回はその概略を示すだけにとどまってしまったが、英文訓読という外国語理解を教育の民主化や社会情勢、何よりも近代日本語との関わりの中で捉え返し、外国語にとどまらず文化の理解のあり方（文化の翻訳）までも今後の考察に含めたい。

注)

1) 漢文学や国語国文学など漢文を専門とする研究者ならば、言わずもがなの「漢文訓読＝翻訳あるいは解釈」という発想は、公教育でしか漢文に親しんだことのないものには違和感を伴う。『漢字典』（第二版）の付録「漢文の読み方 一、漢文の訓読」に、

要するに原文である漢文の意味によってその訳文である訓読が決まるのであるから、訓読は読解の結果なのである。文の正確な意味は原文（漢文）に即して考えなければならない。そして漢文では前の文字（語）が後続の文字（語）を修飾し支配するのが原則で、多種多様の句法もすべてこの原則によって成立しているのである。漢文の表現においては、従って漢文の読解に際しては、文字の順序（語順）が決定的に重要である。（1396）

とわざわざ強調までして解説しているのは、「漢文訓読＝翻訳あるいは解釈」という発想がそこまでは周知の事実ではないことの現れではないだろうか。私一人の無教養のせいでないことを期待したい。

2) 漢文訓読の簡略化と寺子屋など教育機関の整備（つまり教育の民衆化）との関連性については、先行研究の調査等これからの課題としたい。生産力が向上し商品流通が盛んになり生活水準も上昇すると、勢い識字や計算能力の有無そして御法度や高札などの法規の理解遵守が重要となる。そして民衆教化の手段として寺子屋などの必要性が高まり、時代を追うごとにその数が急増していった。寺子屋などの教育機関が民衆教化を目的とするならば、その教育効果を一定水準に保つためにも学習内容や教材の系統化は重要であったはずである。参考までに、『国史大辞典』の「寺子屋開業の情勢」と「寺子屋における学習分野の沿革」をもとに時代別の寺子屋数と学習分野を表にまとめておく。「寺子屋における学習分野の沿革」の中の第1類と第2類は、「読書、習字、読書・習字」と「読書・算術、習字・算術、読書・習字・算術、算術」と細分化されているがここでは年代別の合計数を示している。第3類は、第1類もしくは第2類に「習礼・画・茶・花または謡など」のうち一つまたは複数の分野を併設した寺子屋を指しているので、ここでは割愛した。第4類は第1類の読書を改変した和学または漢学を教える寺子屋の数を示す。第5類は、以上の4種類に属さないすべてを表すが数量的に大きくないので、これも割愛した。

年代	寺子屋開業数	年平均開業数	年代	第1類	第2類	第4類
文明－元和	17	0.1				
寛永－延宝	38	0.7	承応－正徳	5	0	0
天和－正徳	39	1.1				
享保	17	0.9	享保－寛延	2	2	0
元文－寛保	16	2				
延享－寛延	14	2				
宝暦	34	2.6	宝暦－安永	6	1	1
明和	30	3.8				
安永	29	3.2				
天明	101	12.6	天明－享和	18	10	1
寛政	165	13.8				
享和	58	19.3				
文化	387	27.4	文化－文政	91	36	6
文政	676	56.3				
天保	1984	141.7	天保－弘化	351	145	22
弘化－嘉永	2398	239.8	嘉永－慶応	2009	871	91
安政－慶応	4293	306.6				
明治元－8年	1035	129.4	明治	4573	2035	145

3) 時代は明治に下ることになるが、漢文訓読という文体が明治の書生たちにとって、「自尊心を快くゆさぶる文体」であったことを、小森陽一は指摘する。

漢籍や洋書を教養の糧とし、「通俗躰の不雅なるよりは漢文躰の高尚なるを愛し自らも其躰を書き人にも其躰を書きしめたる」と「棒讀風」の漢文体が、漢学的教養を身につけ、西欧の新文化に通じていた知識人たちにとって、その自尊心を快くゆさぶる文体であった……立身出世をめざして都会に集まり、「俗語」で書かれた恋愛譚＝人情本による感情教育を経た書生たちは、『花柳春話』の中に自分たちの理想と決意を綴る文体＝「棒讀風」漢文体によって形象化された、理想的な愛の世界を発見したのであろう。立身出世と理想的な恋愛の成就という、書生にとっての二つの大きな夢が、『花柳春話』という小説において「棒讀風」の漢文体によって実体化されたのである。(傍点は原文 90-91)

「棒讀風」とは一つの調子で文章を高らかに音読するのに相応しい文体を指し、「棒讀風」される文章は漢文訓読であった。簡略化された漢文訓読は、「棒讀風」という形で記憶された漢文を必要に応じて音声化するのに適していたと言える。

4) 「訳言」で示されている語句注の例の一つ挙げておく。「△ベクヴァム(其事ニ適フナリ。其事ニ宜キナリ。此ニハ学習ニコレヲ言フ。即応ニ益ヲ得ベシト云義トスベシ)。」この語句注は、後に言及する福澤諭吉が自伝で語る会読の場での講釈・解釈を再現したものと言える。会読の場で、口頭でやり取りされる語句の釈義や思想の講釈をすべて文字で再現することは不可能だ。その意味でも、簡略化された漢文訓読を模した「約言」は、原文理解の表現というよりは原文理解のための方便であったといえる。

5) この直訳を解するものたちのエリート意識については、「「遠い過去のことについて書き記す歴史家は……山の上からそういった過去の世界を見ることができる」は直訳か」を参照。

6) 森岡健二(1988)は、「漢文読み下し型が漢文脈という新しい文体を生んだように、英文読み下しの型も次に述べるように欧文脈という文体」(202-3)を生んだと言う。そして、「例の外国語解読法」である「直訳によって外国語の解読」を学んでいるうちに「直訳の型が思考の一形式になった」明治の青年たちが、言文一致という新しい文章運動が台頭してくる明治20年以降に、「この新しい思考の型を自分自身の文章に反映させようとしたことは、自然の勢いであつたらう」と解釈する。本文で述べたように、確かに英文訓読は漢文訓読の影響下で生まれた。しかし、漢文訓読が漢文から自律した文体となったと言えるが、英文訓読は英文から自律したとは言えないのではないだろうか。おそらくは、日本語にない概念をどう日本語に訳すかという問題と大きく関わるはずで、文化の翻訳の領域に属する。

【参考文献】

- 石川松太郎 (1988) 「寺子屋」『国史大辞典』 吉川弘文館
- 小和田顯 他 (2006) 『漢字典』 第二版 旺文社
- 小森陽一 (1988) 『構造としての語り』 新曜社
- 齋藤文俊 (2011) 『漢文訓読と近代日本語の形成』 勉誠出版
- 齋藤稀史 (2005) 『漢文脈の近代 清末＝明治の文学圏』 名古屋大学出版会
- (2007) 『漢文脈と近代日本 もう一つの言葉の世界』 NHKブックス
- 齋藤兆史 (2001) 『英語襲来と日本人 えげれす語事始』 講談社選書メチエ
- 惣郷正明 (1983) 『英語学び始め』 朝日イブニングニュース社
- 築島裕 (1984) 「訓読」『国史大辞典』 吉川弘文館
- 中村春作 他 (2008) 『「訓読」論 東アジア漢文世界と日本語』 勉誠出版
- (2010) 『続「訓読」論 東アジア漢文世界の形成』 勉誠出版
- 藤本幸伸 (2009) 「「遠い過去のことについて書き記す歴史家は……山の上からそういった過去の世界を見ることができる」は直訳か」『研究論叢 第59巻 第1部・第2部』 山口大学教育学部
- 文部省 (1876) 『巴来 萬國史』 国立国会図書館 近代デジタルライブラリー
- 福澤諭吉 富田正文校訂 (1978) 『新訂 福翁自伝』 岩波文庫
- 松沼次郎 他 (1976) 『日本思想体系64 洋学 上』 岩波書店
- 森岡健二 (1988) 「翻訳における意識と直訳—欧文脈の発達と定着」『現代語研究 第5巻 文体と表現』 明治書院
- (1999) 『欧文訓読の研究—欧文脈の形成—』 明治書院
- 柳父章 (2004) 『近代日本語の思想』 法政大学出版局